

# 図書館だより

令和3年10月29日 読書週間号①

## 図書館こぼれ話

体育館脇通路に飾ってある図書委員のPOPで紹介した本は図書館で展示中です！POPは今月いっぱい終了しますが、本の展示は続けますので、気になる本を見つけたら借りにきてください。

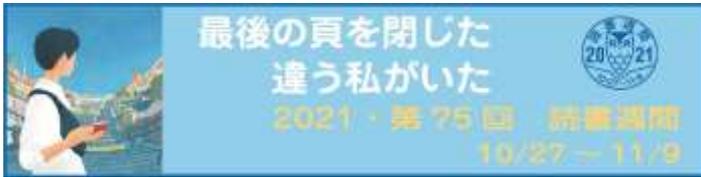


みなさんはどんな秋を過ごしていますか。私は読書の秋を楽しんでいます。さらには読書の秋の中で食欲の秋も満喫しています。小川糸さんの『あつあつを召し上がれ』(913.6-オ 新潮社)もその1冊。7つの短編のすべてに食べ物が登場します。それはかき氷だったり、ぶたばら飯だったり、きりたんぽだったり、様々ですが、どれも主人公たちにとって大切な意味を持った食べ物です。未来に繋がっていく食事があれば、ひとつの区切りをつけるための食事もあります。おいしいだけでなく味わい深さがどの物語からも伝わってきます。



## 読書週間が始まりました！！

10月27日(水)～11月9日(火)は読書週間です。戦後間もない1947年から始まったこの読書週間は今年で75回目を迎えました。今年の標語はこちら！



この機会に読書の楽しさを知ってもらえるよう館内でもたくさんの本を紹介＆展示して待っています！！

今年もなかなか思うように出かけられない日が続きましたが、そんな私たちに本はこれまでと同じようにたくさんの世界を届けてくれています。異世界の物語を楽しんだり、新しい知識を身につけたり、美しい景色や素敵な言葉に出会ったりといった読書体験は自分自身をステップアップさせてくれるものだと思っています。今回と次回の図書館だよりでは、この標語をキーワードにして【読んでみる前と後、変化を感じられる本】を紹介していきます。

### ●一歩を踏み出す勇気をもらえる本

#### 913.6-テ 『雨夜の星たち』

寺地 はるな || 著 徳間書店

空気を読むという言葉があります。その場の雰囲気を感じ、行動するのが苦手な人はできない自分に悩むこともあるでしょう。この物語の主人公 三葉も空気が読めません。他人に興味もありません。しかし、本人は気に病むことなく、ありのまま生きています。率直な物言いが理解されない時もあるけれど、三葉らしさを受け止めてくれる人もいます。自分らしく生きることに自信が持てます。

#### 929.1-ソ 『三十の反撃』

ソン・ウオンピョン || 著 祥伝社

『確かなのは、何か少しも変わらなかったとしたら、それは誰も何も行動しなかったということです』

努力しても上手くいかない。自分には力が無いと感じる度、本当にやりたいことがわからなくなる。そんなキム・ジヘが同僚であるギョウクの一言をきっかけにもがき、悩み、失敗しながらも前へ進み出します。その先で彼女は何を掴むのでしょうか。

### ●疲れた心が回復する本

#### 913.6-マ 『うつしが丘の不幸の家』

町田 そのこ || 著 東京創元社

うつしが丘に建つ1軒の家。そこには何組もの家族が住んでいっていき、「不幸の家」と呼ばれるようになっていた。「どうしてこんなことになったんだろう」と上手くいかない自分を嘆く住人たちの5つの物語。しかし、どの物語も決して読者を暗い気持ちにすることはありません。しっかりと現実を見つめ、自分なりの突破口を開いていく姿に励まされ、心が温まります。

#### 914.6-サ 『九十八歳。戦いやまず日は暮れず』

佐藤 愛子 || 著 小学館

この秋、98歳を迎える作家 佐藤愛子さんの“最後のエッセイ集”。98歳ということもこれで書き納めだということも感じさせないキレとユーモアに溢れた文章で綴る佐藤さんの日常を読んでいると、逞しく生きる力をわけてもらっている気持ちになります。サバサバとした佐藤さんの言い回しは秋晴れのようにカラッと爽快でありながら、人生の大切なことを教えてくれます。